

令和6年第1回滋賀県社会教育委員会議 概要

〔日 時〕 令和6年7月11日（木）

9:30～12:00

〔会 場〕 滋賀県庁北新館5 B会議室

【出席委員(委員名簿順)】

中北 隆尚 委員	箕浦 博樹 委員	川端 一 委員	橘 円 委員
藤原 麻美 委員	森 佐江子 委員	平松 成美 委員	岨中 庸子 委員
内山 淳子 委員	上田 洋平 委員	角出 好隆 委員	中村 一彦 委員
高橋 宏和 委員	梅村 亮介 委員	福井 心空夢 委員	(15名)

1 開 会

- (1) 教育長挨拶
- (2) 自己紹介
- (3) 説明

2 議 事

- (1) 議長・副議長の選出について
 - (2) 審議テーマ 「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について」
～学びを通じた地域社会のつながりづくり～
討議1：令和6年3月の社会教育委員会議の報告と今期テーマ設定について
討議2：今期の審議、研究調査の進め方について
 - (3) その他
- ## 3 閉 会
- (1) 課長挨拶
 - (2) 事務連絡

【配付資料】

- 資料1：滋賀県社会教育委員名簿
- 資料2：滋賀県社会教育委員に係る関係法令等(抜粋)
- 資料3：滋賀県社会教育委員会議(令和6～7年度)の審議について
- 資料4：令和6、7年滋賀県社会教育委員会議イメージ
- 資料5：令和6年度 滋賀県社会教育委員会議年間予定 概要

【配付物：冊子およびリーフレット】

- ・ 滋賀県社会教育委員会議（報告）（令和6年3月）
「誰一人取り残すことのない教育の実現に向けた生涯学習のあり方について」
- ・ 第4期滋賀県教育振興基本計画
- ・ 滋賀の社会教育委員活動ハンドブック
- ・ 滋賀県コミュニティ・スクールリーフレット他、研修チラシ等冊子

1 開 会

- (1) 教育長挨拶
- (2) 自己紹介
- (3) 説明：日程、配付物、社会教育委員の職務等

2 議 事

- (1) 議長・副議長の選出について

議長：川端 一 委員 副議長：上田 洋平 委員 を選出

- (2) 審議テーマ 「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について」
～学びを通じた地域社会のつながりづくり～

討議1：令和6年3月の社会教育委員会議の報告と今期テーマ設定について

川端議長

議事（2）審議テーマにかかる討議1に入らせていただく。事務局より説明を。

生涯学習課 川口（前期報告書、資料3、第4期滋賀県教育振興基本計画で説明）

○前期会議の報告書の内容について

- ・ 誰一人取り残すことのない教育の実現に必要なこととして、■心理的安全性のある「居場所」 ■受け止める、支える、つなぐ「人」 ■つながるための「学び」に整理し、審議したことをまとめている。
- ・ 生涯学習・社会教育がどのような役割を果たすべきかについては、■当事者の思いに気づき、寄り添う ■子どもにも、大人にもサポートを ■多様な主体と連携しての3点に整理してまとめている。
- ・ 具体的な施策に反映するために、「施策具現化の視点🔑」を示し、令和6年度から当課事業で取り入れている。それらを踏まえて当課事業への評価や御意見をいただきたい。

○今期の審議テーマについて

- ・ 第4期滋賀県教育振興基本計画（以降、基本計画）では、心理的安全性からウェルビーイングへ、困り感をもつ方に寄り添う居場所づくりや、公共施設としての役割など、「誰一人取り残すことのない」視点が随所に取り上げられている。
- ・ この基本計画は、滋賀県の生涯学習・社会教育の推進計画としての側面もある。計画に基づいた施策や事例等の研究調査をふまえ、具体的な社会教育推進を中心に審議いただきたい。
- ・ 審議テーマにある「地域への誇りと愛着を育む」は、基本計画の全体的な方向性でもあり、令和5年度の近畿地区社会教育研究大会（滋賀大会）のテーマとして発信されたキーワードでもある。社会教育をとおしてそれらを育むことが、地域課題の解決、持続可能な共生社会の実現につながると考える。
- ・ 特に社会教育に関連した内容は、基本計画の柱Ⅲ「みんなで学びに関わる」にまとめてある。社会全体を学びの当事者と捉え、社会のみんなで学びに関わる取組を推進し、みんなの幸せの実現を目指すこととしており、その実現の基盤となる一つが地域社会のつながりである。柱Ⅲ（2）地域社会で学びをつなげる ①地域と共に取り組む学びの推進 ②企業・

NPO等と共に取り組む学びの推進 ③家庭と共に取り組む学びの推進をととして、地域社会のつながりづくりをどのように推進するかを具体的な審議内容とするため、～学びを通じた地域社会のつながりづくり～をサブテーマとしたい。

- ・令和6年度は、審議テーマに関連する県事業および県内各地での取組について研究調査を進め、令和7年度は、現地視察・事例報告等をととして、各委員からの情報提供をいただき、学びを通じた地域社会のつながりへの社会教育の役割について具体的に審議し、提言につなげていただきたい。
- ・2年間で会議を4回、その他研修会への参加、現地視察など研究調査活動や、小グループでオンラインでの意見交換の場なども用意したい。

※質疑なし

川端議長

審議テーマはこれでよいか。（委員から了承する声があり）では、このテーマで2年間進めていく。

川端議長

はじめての会議でもあり、いろんな角度から審議テーマに関連した意見や思いを交えやすいように小グループで進めたい。

※座席図を配付し、A、B、C、オンライングループの計4グループに移動。

ここから上田副議長にファシリテーターをお願いしたい。

上田副議長

今配られた用紙の真ん中には、話したいテーマが書いてあり、その周りの8マスに連想した言葉を記入するマンダラートの手法を使って、まずは各自で自由に挙げていただきたい。

「社会教育（生涯学習）と言えバ？」が一つめのテーマ。思い浮かぶものを共有しながら、テーマについて議論していきましょう。

※各自作業

上田副議長

では、お互いの自己紹介も兼ねて、「社会教育と言えバ…」というふうにグループでお話をしていただきたい。お願いします。

※各グループで交流

上田副議長

では、まとまっていなくてもよいので、各グループで交流したことを全体で共有を。

Cグループ：梅村委員

このグループでは、社会課題というか、今世の中で起きている問題みたいなものに関心がある方が多く、少子化対策や学びの機会を得られる人とそうでない人がいることとか、子どもでいうと、自分が学んだ達成感が得られると楽しいと思うが、得られていないのではないとか、そういう達成感を、社会教育をとおして提供できるのではないかという話が出た。

Aグループ：橘委員

自己紹介をしながら連想したことをいくつか出し合い、各自一つに絞って詳しく話していただいた。郷土愛、地域のつながり、機能として持ち合わせている図書館、「学ぶ」と「教える」がぐるぐる回ること、仲間づくり、大人の部活とか、そういうアイデアが出た。

Bグループ：角出委員

書いたものの中で、共通性があるものを挙げた。自ら学ぶ、一生涯できる、つながりが生まれるなど。

オンライングループ：川端議長

出た意見を4つのキーワードにまとめることができた。

- ① 人や社会… つながり、社会づくり、地域づくり、自治会
- ② 時間 … 今、これから、未来、将来のような時系列
- ③ 生き方 … どんなスタイルで生きるか、かしこい体、楽しむ、
わくわくする
- ④ 学び … 機会、場所、教育機関

上田副議長

「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」（三宅香帆著 集英社新書）でも書いてあったが、会社で働くことに「全身全霊」になっている。それではほかのものをつながることもできず、社会にかかわる時間もない。そうではなくて、「半身」を自由にしておくこと。余裕を持って生きられることが大事なんだということかと思う。

次のテーマは、「地域への誇り（愛着）とは？」で、今回の審議テーマでもある。同じようにグループで進めていただきたい。

※各自作業

※各グループで交流

川端議長

では、「地域への誇りと愛着」を社会教育でどのように育んでいくとよいのかについて、意見を聞きながらイメージしていただきたい。気づいたことなど、それぞれ専門の立場から御意見をいただきたい。

Cグループ：梅村委員

一つ目は、そこに思い出があるか、思い出を作れるかというのがあって、それが例えば学校かもしれないし、放課後に集まっていたコンビニの前かもしれない。その場所に自分がいたという思い出があるということが、誇りとか愛着に繋がるのかなと。

二つ目は、その地元で働ける場所があって、県内でも働き口があって、そのままその地域にいられる場所を用意できるかということ。

最後三つ目は、ここにいてよかったという自分の居場所が地域にあれば、そこに誇りとか愛着を持てるのではないかということ。

私自身は、シンプルに挨拶できる関係の人がいることが滋賀県の魅力だと思っていて、去年移住してきたが、私が元いた場所は歩いていてすれ違っても挨拶するような文化がないというか、関係がなかったが、今、守山にいたが、駅前を歩くだけでもすれ違う人みんな挨拶し合っていて、朝通勤する時もスクールガードの人と挨拶していて、挨拶するだけでもその地域に自分が所属しているんだというふうに思えるのは、誇りとか愛着を育んでいく上で一番簡単でかつ大事なことかなと思っていた。

川端議長

ありがとうございます。同じグループで関連していかがか。

中村委員

社会教育と地域経済は表裏一体の関係であって、実は切り離しができない。だからどちらが欠けても駄目かなと思っていて、社会教育を進める立場の方、そして受ける立場の方もおられるが、大事なものは、地域。地域が、地域経済が、元気じゃないと人の心には余裕が生まれない。保護者の方にも余裕が生まれない。食べることで精一杯になってしまう。これは今の滋賀県でも、現実起きている。

そういった中で、企業ももっと積極的に関わっていくべきではないかと思っている。特に滋賀県だと、平和堂さんが社会貢献活動に非常に熱心である。私どももそれに見習っているいろんなことをやっているが、なかなかそれに次ぐ地元の企業さんがまだまだ少ないと思っている。

本社のすぐ隣に彦根翔西館高校があり、この2学期、民間企業として生徒にできることをやってほしいという依頼があり、授業に行く。一つは社会貢献活動について話をするのと、もう一つは高校3年生が防災にすごく関心を持っているということで、例えば非常食防災グッズに関する取組をしたいと。そのお金を最後は能登の被災地に寄付したいと。そういう考えを持っている高校生の方々と今関わらせていただいている。先生方からはさらに何かできることはないかと相談を受けているところ。

滋賀県の有力企業さんはもっとこういった取組に関わるべきではないかと考えている。

福井委員

私が今まで過ごしてきた中で、同級生と今でも結構集まるが、みんながいてくれるということが私にはすごく大きく感じる。私にはここに居場所があると感じられることが、滋賀県にいますごく安心するところだと思っている。小中学生の時には通学する際に地域の方

が「おはよう。」と言ってくださったり、今でも大学に行く際に、地域の方が小学生に「おはよう。」と言って見守りをされているが、大学生の私にも「おはよう。」と言ってくださり、そこでとても元気が出る。そういうところから、地域は挨拶ができたり、ここにいたらとても安心するなという気持ちを持てたりすることが大事なかなと思う。

川端議長

ありがとうございます。次はBグループからお願いします。

Bグループ：内山委員

このグループで話し合われたことは、地元である地域には、好きな場所や好きな人がいるということ。つまり、住みやすさや親しみがあるということから、自分の居場所であるという気持ちが生まれ、「地域への誇りと愛着」のベースになっている。

さらには、その地域の産物や産業を大事にしたいという地域愛がある。例えば、歴史文化、伝統、また、地場産業として誇れるような地域の産業があるということ。

そして、地域に美しい景色、自分が好きな景色もあることで、自分がそこにいて落ち着く場所、精神的な居場所でもあるということだった。

そうした地元や地域では、つながりが持てるが、それだけではなく、これからさらに地域を愛していくためには、「新たな掘り起こし」も必要であろうという話になった。今のつながりはとても安心な場所ではあるが、新たなつながりを作っていく、そういったもう少し先に行く、そんな地域も必要ではないかという視点も出していた。

川端議長

平松委員は「絵本による街づくりの会」を作っておられ、どんな活動をされているのかも含めてお話しいただければ。

平松委員

2004年から活動を始めた。当時はまだ絵本は赤ちゃんのものと思われていた方が多かったが、絵本の魅力をたくさんの方にお出会いして伝えたかった。

また、自然豊かなところで子育てをしたいと思ってマキノに引っ越した。家族みんなは、虹が出た、雪が降ったとか、ちょっと変化があると外に飛び出していたけれど、意外と地元の人が出てこないのがすごくもったいない思いがあった。絵本はどちらかというとインドアのイメージある。私たちの活動の中で、絵本の魅力に出会ってない人にどうすれば出会ってもらえるかということを考えている。自然体験や野草を見つけに行く活動で、例えばヨモギを積んで、ヨモギ団子を作るという絵本もあるので、体験に興味を持って参加したら、そこで絵本と出会うという仕掛けを、最初の頃からこだわってやっている。

活動を始めて今年で20年になるが、そういう活動の中で、少しずついろんなことでつながるようになった。子ども時代の楽しい思い出は、生まれてきてよかったんだとか、愛されるという自尊感情を自然と育むし、子どもの頃に楽しかったことが、その土地で生まれ育っ

た街が好きになったりとか、そこで出会った友だちや大人が好きとか、すごく大事だと思うので、「三つ子の魂百まで」と言うが、幼児期にたくさん言葉かけをしてもらって、みんなに愛されること、そういう体験や環境で育つことがとても大事なかなと思う。

ただ、今の社会、小さいときは家庭での子育てなどに地域も応援はするけれど、経済状況も含め、やはり最終的には家庭が落ち着いていないと、なかなか現実は厳しいと思う。

地域の活動に参加できる家族とか子どもはよいが、本当はこういう体験をしてほしいなと思う子どもたちが実際はなかなか参加してもらいにくいという現状があるので、このままの活動でよいのか、どうすべきかというのを日々感じているところ。

滋賀県は多くの市町でブックスタート事業があり、全ての子どもとその保護者の方に絵本をプレゼントすることでたくさんの言葉かけをしてくださいねという思いで各市町が取り組んでいる。実際、4ヶ月健診の会場で、泣いてばかりいる赤ちゃんに絵本なんてわからないという保護者さんもいる。その場で絵本を読ませていただくことで、抱っこされている子どもが絵本の方に動いていたりとか、手を出したりとか、声を出したりとか、我が子を見て、「この子楽しんでるんだな」ということで保護者の方が今までとは少し変わっていくという場面を、ブックスタートの現場で感じたこともある。やはりそうした取組が、切れることなく積み重ねることがとても大事だと活動をとおして思う。

梅村委員

今の話を聞いて、とても賛同するというか、その課題を解決するのが社会教育の役割かなとすごく思う。「体験格差」という言葉があるが、まさしくその話だと思う。体験する機会が全然ない。お金がある人は塾にも習い事にも通えるけれど、お金がない人はそういう体験がしにくい。学校でもよく似たことがあり、この担任の先生だったからいっぱい体験ができたという人もいれば、そうではない人もいる。環境や出会う人に左右される部分がある。

教育というと、学校教育、家庭教育の話になることが多いが、私が去年学んだ社会教育士の講座の中で、家庭教育、学校教育、それ以外に社会教育があるということを知った。教育をよくしようという話になると学校教育と家庭教育をどうしようかという話ばかりになってしまうが、学校の先生方も状況的にいっぱいいいの中で、社会教育がそれを補えるようなことができるのではないかと考えている。そういう活動を自身も法人を立ち上げて進めていこうとしている。

体験格差を解消できるように、いかに体験の機会や場を地域で増やせるかっていうことが社会教育の役割だし、中村委員がおっしゃった企業の方が学校に行かれているように、企業の方が地域の中で社会教育を提供するようになれば、学校の先生に頼らなくてもいい教育の形ができると思う。それが地域にあるからこそ、その地域に愛着や誇りが育まれるのではないかと、そこが社会教育の役割なのかなと思う。

岨中委員

家庭教育支援事業を竜王町でコーディネートする立場でスクールソーシャルワーカーをしている。地域とつながれていない御家庭にも関わる仕事をしてきた。体験格差も実感する。

竜王町では家庭とつながるために、3年前から訪問型家庭教育支援事業をしている。自分自身も公的な立場ではなく、居場所づくりの活動もしている。安心できる居場所だけではなく、安心できる人がいることも大切だと自分が関わってきた子どもを見て思う。

また、竜王町では、家庭教育支援事業と、学童や子どもの居場所づくり、フリースクールを運営している法人と一緒に、コラボしながら、この夏、図書館で、「図書館で縁日」を開催する。教育委員会も地域の人たちも関わりながら実施する。そこにつながる子はよいのだが、来られない、アクセスできない子たちの存在を、必ず頭に置いて考えていきたい。

また、昨年度まで日野町の図書館長をされていた方から、図書館の活動を伺い、すごく参考にさせていただいている。図書館での居場所づくりへと発展してきた。社会教育の大切さをまだまだ学び中というところ。

角出委員

信楽学区での取組に、地域を学んでいこうという「地域学」がある。信楽町内の小学校3年生の子どもたちが一斉に、一日同じ学習をする。町内5つの小学校があり、それぞれの学校の特徴、自慢を伝え合おうという学習をする。例えば、雲井小学校は紫香楽宮跡のこと、信楽小学校は伝統工芸の信楽焼、小原小学校は、大塚オーミ陶業などの工場関係のこと、朝宮小学校はお茶、多羅尾小学校は歴史など、一日かけて各地を回りながら地域の良さを学び合う。やはりその中で地域を大事に思う気持ちを育みながら、つながりをつくっていくことが大事なことだと思う。その継続のために4月から担任が集まり、計画を練っている。

昨日、信楽高原鉄道関係の会議があり、高原鉄道から見える風景のコンクールのようなものをする話が出た。地域の風景も、誇りと愛着に関連するのではと思った。今の取組だけでは、どんどん人口が減少し、過疎化が進むことには変わりがない。何とかそれを変えていく方法はないか、地域が元気になる方法や新しい取組はないかと考えているところ。

川端議長

ありがとうございます。次はAグループお願いします。

Aグループ：藤原委員

先ほどのチームと同じで、「居場所があること」という意見があった。心理的安全性に関連して、「自分がこういうことが好きだ」と惜しみなく伝えられる関係性、よいこともそうでないことも伝え合える関係性が地域の中にあることが、愛着を持てる一つではないか。

他には、その地域で生きている手応えがあるということや、遠くから帰省すると、変わらずある自然、山や川などが自分を受け入れてくれる、そういう環境も地域の誇りにつながるのではないかという意見も出た。

中北委員

私が勤務する余呉小中学校の地域は、長浜市の中でも人口減少が激しい地域である。高齢化率は既に50%を超えている。平成17年に旧の余呉町の3小学校が一つになり、余呉小へ、

さらに平成30年に鏡岡中学校と一緒に、施設一体型の義務教育学校として開校して今年度7年目を迎えている。開校当初の校長は地元の方で、学校教育目標が「余呉に学び、大きな心で未来を生き抜く」サブタイトルが「しなやかにそしてたくましく」である。それを具現化するための基本方針が「学びをつなぐ」「仲間をつなぐ」「ふるさとをつなぐ」。その根底にあるのは、冒頭挨拶で教育長が話された、人と人との豊かなつながり。これをもとに子どもたちが様々な実践をしている。

私は生涯学習というのは理念だと思う。その理念を具現化するのが社会教育だと思う。学校教育、家庭教育はすべてそこに含まれるもの。その学校教育の中から本校の話をする、「ふるさとをつなぐ」を具現化するために、生活科と総合的な学習の時間を使った「よごふるさと科」という独自教科がある。

本校は義務教育学校なので、9年間で3ステージに分けており、第1ステージは小学校1年生から4年生、第2ステージは5年生から7年生（中学1年生）、第3ステージは8年、9年生。「ふるさとをつなぐ」においては、大まかなテーマとして第1ステージは、「余呉を知る 余呉から学ぶ」。第2ステージは、「余呉を調べる 余呉から考える」。第3ステージは、「余呉を変える 余呉から発信する」としている。

その取組の集大成が毎年11月の文化の日に学校で行っているもので、そのときは地域の方にもお越しいただいて、広く周知している。特に第3ステージの学園生では、進路を考えたときに、地元に残る子どももいるが、故郷から離れていく子もいる。たとえ、余呉を離れていっても、こういった学びが根本にあれば、やがて何らかの形で地域に返してくれる。恩返しというか、いろんな形があるが、そういったことにつながっていくのだと思う。地域への誇りを育むということは、人として生きていくための基盤、根底に位置づくものと思う。本校の取組ということで紹介をさせていただいた。

橘委員

自身の地域の学校は700人後半ぐらい子どもがいる。結構大きい。地域を考える点でもなかなか大きい。大きいとなると、子ども同士の関係性とか、そういうものを丁寧に作っていくのがすごく難しいなと思って、どういう単位を自分の地域として感じるかというところで、余呉小中学校と、自身の地域との差をしみじみ感じながら聞いていた。大きい規模だったらどんなことができるのかという思いがむくむくと湧いてきた。

それと同時に、社会教育でいろんな取組をするけれど、学校教育の現場の先生方にとって、社会教育をどれぐらい御理解いただけているのかなと、常々不安というか疑問がある。社会教育主事や社会教育士で職責がおありになるなど、その役割を学校の校務分掌の中で担っておられる先生というのは確におられる。しかし、社会教育士などの資格を持っていてもその立場になかったら、何か職責のチャンネルが入っていないのではと感ずることがよくある。資格を取るときにあんなに学んだのに、あんなに学んで熱い思いになって現場に帰ってきたのに、寂しい気持ちになることがある。そういう学校教育の現場において、その先生方はどのようにこの社会教育を促されていかれるのかという実態が全然わからないので、そこはこれから知りたいと思う。

森委員

長浜図書館は、令和元年12月に新築移転し、図書館と社会福祉協議会とまちづくりセンターとで複合化した。ボードレスにつながりあうことを目標に作られた施設。

そこに勤務するようになってから、悩みが増えた。複合施設に来られる方の中に、例えば生活に困り、社会福祉協議会に来られる方がおられれば、まちづくりセンターで余暇、時間、お金に多少余裕があって活動を熱心にされてる方とか、図書館に来られる方、朝から晩までずっとおられる高齢者の方とか、昼間は学校に行き、その後図書館に来る子とか、本当にいろんな方が来られる。また、社会福祉協議会がある関係で、重層的支援体制整備事業として参加支援事業を行っており、協力事業所に図書館もなっている。そこにも引きこもりの方が社会復帰のためにボランティアで来られたりとか。本当にいろんな方が来られている。先ほどからお話があった体験格差じゃないですけども、その生活環境であったりとか、置かれてる環境、どういった生育を過ごしてきたのかってということによって様々な方がおられ、図書館も生涯学習施設の一つだけれど、その一人ひとりの方に寄り添ってどういう関わり方をすればよいのか、非常に悩みが深まっている状況。

社会教育は非常に大きなものであり、誰一人取り残さないことは必要なことだが、ものすごく大変なことだと報告書を読ませていただいて思っていたところ。

川端議長

ありがとうございます。オンライン参加の箕浦委員から、先ほど「きんじょ」という言葉を教えていただいた。皆さんに御説明をお願いしたい。

箕浦委員

近くで助けると書いて「近助」という言葉が個人的に非常に好きで、自助、共助、公助という言葉は3点セットでよく言われるが、近くで助けるという「近助」が一番大切で、かつ機能しやすいのかなと、田舎に住む人間として思っているところ。

具体的なイメージとしては、例えば、独居老人の見守りも含めて、普段から、隣同士の付き合い、いわゆる近いところの近所をという意味での近所づきあい等があれば、この近くの人を助けるという意味の近助も有効に働くんじゃないかと思っている。つながりっていうのは、何かでつながろうとするのではなくて、日常、それこそ挨拶も含めて、いろんな形でつながれると思う。その考え方がもっと広まるとよいのではと、地域社会の一員として思っているところ。

川端議長

オンライン参加の高橋委員は、レイカディア大学など学びの機会をいろいろ提供いただいている立場。皆さんに御紹介いただきたい。

高橋委員

社会福祉協議会（県社協、市町社協）では、全てが社会教育というか生涯学習につながっていくと考えている。県社協の事業としては、レイカディア大学で60歳以上のシニアの方が2年間学ぶ場がある。やはりそこでもつながりをとても大事に感じておられる。

市町社協の取組では、学校でいろんな福祉のことを学ばれる出前授業がある。

今、県社協、市町社協の方で力を入れていることに、「こども食堂」がある。単にご飯を食べることだけではなく、そこで遊びを通じた学びであったりとか、保護者の方もそこでいろいろ学ぶというようなところで、社協ではそういった取組をしているというところ。

川端議長

ありがとうございます。皆さん、他にあればいかがか。

中村委員

石川県に社会福祉法人「佛子園」がある。理事長はお坊さん。6年前と今年の5月にテレビ番組の特集でも取り上げられた。「佛子園」のキーワードは「ごちゃまぜ」。障害者、高齢者、地域住民、学生と、様々な人が集い、施設だけではなく、レストラン、カフェ、図書館、いろんなものが全て揃った街づくりをされている。

そこでの大きな成果は、高齢者を支えるために、ひきこもりの子どもたちが、高齢者の世話をする。障害者の世話を認知症の方がされて、認知症の方の症状が改善する。そこに行けば必ず誰かが声をかけてくれるなど、記事が紹介されていた。全国的に非常に注目を集めているということで取り上げられていた。能登地方の震災においても、輪島にもそういう施設を作られており、被災された方を助ける拠点として役にも立ったということで注目されていた。障害者、高齢者、学生、小学生、地域住民、いろんな方を合わせる取組からつながりが生まれる。滋賀県が参考にとできるところかなと思う。

川端委員

「ごちゃまぜ」ということでいえば、上田副議長がよく使われる言葉があるんですけど、ちょっといいですか。

上田副議長

まさにこの場が「ごちゃまぜ」だが、皆さんからいろいろな意見が出された。

去年行われた近畿地区の社会教育研究大会の講演の中で申し上げたのが、これまでの社会のあり方、あるいは組織のあり方というのは、どちらかというと「分けて・集めて・縛る」、同じものをより分けて、選別して、一か所に集める、そして縛る、束ねるという形でやってきた。これは非常に効率がよい方法。一方向に進めるには効率がよいけれども、様々な課題が山積する中で、それをどう解決していくか、それを乗り越えていくのかという時には、「まぜて・散らして・つなぐ」いろいろな多様な人々が混ざり合って、そして適度に散らばって、そしてつながっている状況。これが非常に大事ではないかということ。このような社

会を作るにはどうしていけばよいのか。「社交場」という言葉があるが、地域というのは斜めに交わる「斜交場」。多様な世代が斜めに交わって、挨拶が交わせるような場所であると感じている。そういう斜交場をどう作っていくか。たとえば学校の活動に社会教育士が関わって触媒の役割を果たしながら、まさに混ざっていく、そして緩やかにつながっていくことが重要ではないか。そういうことをどうやって作っていくかが、今期の社会教育委員会議の中で考えられるとよいのではないか。

皆さん方のお話を聞いていると、地域への愛着や誇りは強制的に育まれるものではなく、自ずと育まれていくものだろうと思う。その環境をどう作っていくのかというのを、今、ヒントをいろいろいただいたところ。体験を通じて学び、育つ、でもその体験には格差があることをどう埋めていくのか、討議の中で私は強く感じた。

川端議長

私は地元の小学校でサポートや、地域と学校をつなぐいろいろな役割をさせていただいている。元教員だが、地元の学校には一度も勤めたことがない。退職してから少しは地元に関わりたい、自分の経験が少しでも現場に活かせるという思いで関わらせていただいている。皆さんからのお話にあったように、社会教育と学校教育との関わりについて私も気にしているところ。

いろんな家庭の子どもたち、まさに様々な経験ができて子どもとそうでない子ども、置かれている状況の違いがあって、そこをどう学校が埋めきれぬのか、いや、また社会がそこを補いきれぬのかということも気にしながら、毎日子どもたちの様子を見させていただいている。

社会教育が元気になって、素敵な社会のあり方をどんどん示していきたいと思う。いろんな課題があるし、その課題を一つ一つどうクリアするかということだが、逆の言い方をすると、素敵な社会を作るために私がどんなことにわくわく夢を持ってできるのか、そういうことがこの会議の中で少しでも発信できたらなという思いを持っているところ。

平松委員

先ほど県社協の高橋さんのお話を聞き、高島社協での取組を紹介したい。フリースペースで中2の頃から来られて今高2になっておられる方と週一回関わっている。フリースペースは高校3年で、一旦制度としては終わる。その中で家庭でいろいろな事情があって、高校卒業時、その先どうするかはあるが、お金の使い方とか、独り立ちするにはどうすることが必要とか、そういうことを関わる中で伝えていけるといいなという思いはある。ただ、来ている子にすれば、そこはいろいろな勉強をする場じゃなくて、自由に自分が出せる場であるので、その場ではそういうことは言いにくい、コーディネーターをしてくださっている社協の職員さんが、高島の中にも何ヶ所もそういう場所があるので、やはりそれぐらいの年齢になった子たちには、そういうことも伝えられるように、社協のその事業を担う立場でしていかないといけないなと考えてくださっている。

社会教育とは、大きくくりでの大勢に対して一気にしていく部分もあると思うが、必要

に応じて、個別にとか、その対象者の抱えている課題に対して伝える場面、学校でもできない、家庭でもできないところを、地域のどこかでちゃんと伝えてちゃんと大人として、自信を持って生きていけるような、そういう取組というのは、一部のセクションとか、一部の関わってる人だけではなく、そういう実態があることをみんなが知って、みんなで進めていくことが大事。これからの課題でもある。

橘委員

私は滋賀県PTA連絡協議会の顧問という立場で参加させていただいている。PTAは昨今いろんな問題が起こっており、「店じまい」にかかっているところが多くある。私の地元の小学校のPTAもなくなった。最近、道路の補修の関係で一時的に通学路が変わってしまい、大きな交差点を渡らないといけない状況になった。各地区の地区委員と保護者の代表の方はいるが、PTAがなくなったので、それぞれの考えと学校の考えと子どもの考えとをすり合わせる機会がない。学校は、こういう通学路ではどうかという提案をするけれども最終決めるのは保護者ですよというスタンス。そういうところをつないでこそ地域学校協働活動だったり、社会教育だったり、学校教育だったりするんじゃないのかなと思うけれど、なかなかその場を持ってもらえない。そういう点で保護者の方からSOSをいただき、どうすべきか話をしているところ。

PTAって確かに面倒くさいこともあるが、こういう保護者や子どもに関わることで何か事が起こったときに、無いと困り、あたふたするというこの状況が、どこでも起こっているのではないかと思う。そんなときにもう一回つなぎ直すのにどうしたらよいか私が抱えている課題。

この会議の中でもいろんな知恵をいただきながら関係修復に当たっていききたいと思う。PTAが元と同じ形に戻るのは多分違うと思うし、無理だと思う。けれども、今保護者さんたちのいろんな体験の格差とか経済格差とか、思いの格差がある中で、でもやっぱり子どもに関わる親というのはその立場は揺るぎないと思うので、何とか新しい形を探っていきたいと思う。決意表明だが、ぜひまた皆さんのお力を貸していただきたいと思う。

討議2：今期の審議、研究調査の進め方について

川端議長

今期のテーマについて、会議のスタートということもあり、たくさん時間をとって議論をさせていただいた。引き続き、討議2に関して事務局からお願いしたい。

生涯学習課 川口（資料4、5で説明）

- ・ 資料4は、この2年の社会教育委員会議の進め方のイメージ。図の左側は、基本計画柱Ⅲ（2）地域社会で学びをつなげるの3つの項目に、当課事業をあてはめた。
- ・ 例えば、①地域と共に取り組む学びの推進には、学校を核とした地域力強化プラン事業

(CS、地域学校協働活動、県立学校地域協働モデル校)と、読書バリアフリー推進事業がある。②企業・NPO等と共に取り組む学びの推進には、学校支援メニュー等の「地域の力を学校へ」推進事業がある。今年度、シン・しが学校支援メニューフェアを開催し、登録企業や団体と、地域連携の役割を担う学校の先生方等が、直接出会い、情報交換やマッチングの場を設ける予定。③家庭と共に取り組む学びの推進では、訪問型の家庭教育支援の研修会や、市町や各校で家庭教育の講座やサロン等をすすめてくださるファシリテーターを養成する講座を開催し、「支える人を支える」事業に力を入れている。

- ・一方、当課事業だけでなく、県内各地での取組事例がたくさんあると考えており、それらを委員の皆様の御当地や関心のある地域等でリサーチし、主体的に研究調査をいただきたい。
- ・県生涯学習課の事業と委員が各地で主体的に行う研究調査の2本の柱で研究調査をすすめ、学びを通じた地域社会のつながりづくりへの社会教育の役割を具体的に審議し、令和8年3月ごろに提言をいただければと考える。
- ・資料5は、令和6年度の会議、研修等のスケジュール。当課事業の研修、御自身の地域等での取組等に主体的に御参加いただき、研究調査をすすめ、12月予定の小グループのオンライン会議や2月予定のこの会議にて情報共有をいただきたい。

川端議長

この会議そのものの回数は限られており、この2年間、主体的に研究調査活動を進めていくことを資料4、5で説明いただいた。いかがが。

中村委員

8/2、11/11などの研修に参加したい場合の申込みはどのようにすればよいか。

生涯学習課 川口

都度案内させていただく。メールまたはFAXでの申込みをお願いしたい。

資料5に修正点がある。読書バリアフリー研修開催日を、8/2(金)に修正を。

橘委員

資料5の枠三つ目の調査研究活動について質問したい。活動をした場合、レポートのようなものの提出を求められているのか否か。

生涯学習課 川口

御指摘の調査研究活動は、主体的に学んでいただくことを目的としているもの。報告を求めているものではない。学んでいただいたことをもとに、12月頃開催予定のZoom会議や、2月の会議で意見交換や議論をお願いしたい。

上田副議長

まず皆さん方それぞれが持っている事例などもあると思う。こんなところへ視察に行くの

はどうかなど。また何らかの形でそれらを互いに紹介しあうことができればと思う。例えば、フェイスブックのページであるとか、委員のLINEのグループとかの連絡を取り合えるような形のものを作れたらよいのではと思っている。どんな学びをお互いにしているのかをぜひ共有できるような形を作りたい。事務局と相談しながら進めていきたい。

川端議長

上田副議長から提案のあったLINE等でいろいろ情報をお互いに共有していくことについて、事務局とも相談させていただきながら進めていきたい。いかがか。

それが有効に働くように、どうぞ皆さんからも積極的にこういうところでこんなふうになっているということをどんどん情報提供いただき、参加できるときには個別にそこへ参加するというのもお願いをしたいと思う。

(3) その他

川端議長

議事(3) その他の項目について、何かございますか。事務局いかがか。

生涯学習課 川口

特にございません。

川端議長

私から一つ。先ほど、上田副議長からも御提案いただいた、皆さんとお互いに学んでいくということとはとても大事なことだと思う。

全国社会教育委員連合が年に2回発行している「社教情報」の編集委員長を滋賀大の神部先生がされている。そういう情報もどんどん取り入れていく必要があると思う。これまで、事務局から各委員さんに購入の意向を確認し、経費を集めて注文をいただいていた。

こういう会議の設定を県の予算でしていただいているが、それ以外にこういう資料など、調査研究にかかる費用が発生するものについて、委員がそれぞれ会費という形でいくらかずつ出して充てることができないかというのが、私からの提案。

具体的には、年間2,000円、2年間で4,000円の会費という形で、委員15人の分を集めさせていただき、私の方で収支、議長、副議長の方で執行させていただくという形でお願いできないか。必要な部分の経費を賄っていきながら、私たちが主体的に学んでいくというスタイルをとりたい。いかがか。

※賛同

3 閉 会

(1) 課長挨拶

(2) 事務連絡